

戸塚宏の人間学

- | | | |
|----------------------|----------------------------|------------------|
| 1. 薪割りとは徳育
1+. 解説 | 7. サルトル、ボーヴォワールの誤り | 13. 六芸 <書、数 II> |
| 2. 安詳恭敬 (その1) | 8. 獵師の子「サーティ」 | 14. 六芸 <礼、楽 I> |
| 3. 安詳恭敬 (その2) | 9. コアラに学ぶジェンダーフリーの非
人道性 | 15. 六芸 <礼、楽 II> |
| 4. 安詳恭敬 (その3) | 10. 六芸 <射、御 I> | 16. 六芸 <礼、楽 III> |
| 5. 安詳恭敬 (その4) | 11. 六芸 <射、御 II> | 17. 六芸 <楽 II> |
| 6. 長崎・駿ちゃん殺害事件 | 12. 六芸 <書、数 I> | 18. 六芸 <楽 III> |

薪割りは徳育

いわゆる"事件"でマスコミに騒がれていた頃、スクールに近所の植木職人のおじいさんが暇を見つけては手伝いに来てくれていました。ある時、薪割りの指導をしてもらいました。映画などで見るのと違い、輪切りにした丸太から薪を作り出すのが「薪割り」でした。

まず、「勝手にやってみろ」と言われてやってみるのですが、斧が跳ね返されるばかりでまさに"刃がたちません"。半日経っても丸太のままです。

おじいさんにお手本を見せてもらおうと、10分もかからずに薪にしてしまいます。刃を年輪に並行に(接線方向に)あて、まるでキャベツの皮をむくように、まるで丸太の周りに花が咲くように、斧(おの)をストーンストーンと落とすだけでパラパラと薪の"もと"ができていきます。丸太は最後まで動かさずに、人間の方が周りを動いていきます。あとは、小さな鉈(なた)で適当な大きさの薪にしてできあがり。

さっそく真似をしてみますが、うまくいくものではありません。ここで己の実力が分かり、おじいさんに強烈な尊敬の念が湧いてきます。おじいさんの指導が始まります。

薪割りから見えてくるもの

まず、「己を見よ」。

——「腰がふらついている。目がすわっていない。体の向きが悪い。肩がまっすぐじゃない」

「足の開きが悪い。何でサンダルを履いてるんだ！」

「丸太に意識を集中してないだろ！」

「力を入れすぎ！力で何とかしようとしているんだ。逃げてるんじゃないのか！」

…要するに、「肉体も精神も不安定である」ということです。

次に、「丸太を見ろ」。

——「南向きだったところは年輪が開いているだろう。柔らかいから、まずそこから欠いていけ」

「節、枝はとも硬いから、そこを避けて周りを欠いていき、最後にポロリと抜くようにしろ。どうしても避けられない節は割ってしまえ」

「丸太を動かすな、重いだろ。コラ、倒す奴があるか！」

「切り欠いた木を遠くへ飛ばすな！拾いに行かなきゃならん」

「力を入れるからだ。それに、刃の向きと年輪の縦方向が合っていない。木はねじれているんだぞ！」

…要するに、「目を読め」ということです。

そして最後は「斧を見よ」。

「道具は人と物を結ぶもの。その作用点(線)スピードエネルギーがちゃんとしてなくて何ができるか」

「グリップに力が入りすぎてる！刃がまっすぐに落ちていない」

「刃先に力がこもっていない。余分な力を入れるな！食い込ませたら抜くのに力があるだろう」

「持ち上げる時、前の手を刃先の方にもっと移動させて」

「周りに人がいるだろう、気をつけるんだ！」

それから延々とトレーニングが始まる。「おぬし、できるな」と言われるのは遠い先の事です。

「小児を教うるには、先ず安詳恭敬(あんしょうきょうけい)ならしむるを要す」

「致知(原文では"到知"となっています)より知止に至り、誠意より平天下に至り、灑掃(さいそう)・応対より窮理・尽性に至る」(いずれも『小学』)

薪割りには徳育のために必要なものが全て入っています。

(補足)

「致知(原文では"到知"となっています)より知止に至り、誠意より平天下に至り、灑掃(さいそう)・応対より窮理・尽性に至る」= 「大事」を達成するには、まずは身近な「小事」からきちんと為すべきだということ。

以下は、戸塚校長独自の解説です。

儒教の目的は「修己治人」(己を修めて人を治む)ですから、人の上に立とうとする人間は、まず修身から始めねばなりません。それが順序です。駄目マスコミ、木っ端役人、馬鹿殿、クソ裁判官、無能教師等、皆、己ができていないのに、人の上に立った人間のありさまです。

修身にも順があり、優しいものからやっていかないとものになりません。つまり、「人道に王道なし」という意味です。せっかく戸塚ヨットスクールを支援する会

ですから少し説明を加えておきますと、儒教の「知」は「知行合一」(ちこうごういつ)ということ。「できること」を「知っている」と言います。いわゆる、「単なる知識」ではありません。ですから、致知、知止、誠意、平天下、灑掃(さいそう)、応対、窮理、尽性は全て、「身につける」という意味。「灑掃より窮理」からいきましょう。

掃除ができれば幸福になる

よく、「掃除のできない奴は何をやらしても駄目だ」と言いますね。これが、子供に掃除をやらせる必要のある理由をよく説明しています。「掃除ができる」ということは、「掃除が完璧にできる」ということ。これが、「掃除の仕方を知っている」ということ。さらに、「掃除の理を窮めた」ということです。掃除を窮める(極める)ことによって子供が得るものは、①掃除の How to ②安詳恭敬(進歩する能力) ③物の理 ④幸福になる方法 です。

「兵法の利(理)にまかせて諸芸・諸能の道となせば、万事において、我に師匠なし」(宮本武蔵『五輪の書』)

——これは、②の安詳恭敬、進歩には共通点があるから、それを身につけてしまおうということ。④は、ちゃんとやると結果として幸福になるということ。「なるほど。幸福になりたければこうすればいいのだ」と体得することです。

自動車の好きな人は、車をきれいに洗います。ガソリンスタンドで洗車してもらっても自分で洗っても、結果は同じだけど、自分で洗うと何とも言えぬ満足感があります。これが幸福。自分の行動で目的を達成した時に、「幸福になる」ということを体得するわけです。

③物の理。ほこり、ゴミ、汚れにはそれぞれ、はたき、ほうき、雑巾を使います。ほこり、ゴミ、汚れはそれぞれ、物の性が違うからですが、丸太と斧の関係のように、道具と物の性質をうまく利用しないと、ちゃんとした仕事できません。

皿洗いをすると、水と油の相性の悪さが分かります。ここに、洗剤という両方に相性のいい物を仲立ちとすると、相性が良くなってしまいます。人間関係でも一緒ですね。相性の悪

い2人を協力させる時に、両方に相性のいい人を間に入れておくとうまくいくものです。

窮理はこのように実際の仕事に役立つばかりでなく、人の理にも役立ちます。「水と油だ」とか、「火に油を注ぐようなもの」とか、物と精神を関連づけた言葉がたくさんあるゆえんです。

「能(よ)く人の性を尽くせば則(すなわ)ち能く物の性を尽くす」
(『中庸』)

——これは、逆の場合もあるようです。

このように、灑掃から始まり、順次、体力、気力に合わせて薪割り、ウインドサーフィンとグレードを上げ、理を窮めていきます。

精神的・肉体的技術は行動抜きには創られない

「物の理を知る」「理を窮める」「道を極める」は、名人になるということ。言い換えれば、「技術を創る」ということです。人道の場合も全く同じで、「人の性を尽くす」「理を窮める」は、「精神的技術を創る」ということ。技術は、正しい行動によって創られますから、人道も行動抜きにはできません。修身は行動なんですね。

今の受験戦争は、単に知っているだけの"秀才"を量産し、彼らがマスコミ、役人、重役、裁判官、先生になっていくわけですから、うまくいくわけがありません。仕事もちゃんとできないし、人間関係も子供並み。人の上に立つ能力に全く欠けています。

人道は精神的技術ですから、精神的行動により、創られます。ただし、精神的行動をするためには、肉体的行動が必要なのです。ややこしいですが、このことは「安詳恭敬」の章で書こうと思います。

「灑掃・応対より、尽性に至る」——「性」は人の性のことを言っていると思われます。

「天の命じる。これを性という」(『中庸』)

——「天性」です。本能のことだと思えばいいでしょう。

何度も言うように、理性は本能を発揮する技術のことです。ですから、自分で創るより仕方ありません。理性は遺伝

しませんよね。偉大なる人の子供でも、親ほどではないし、時にはとんでもない二代目ができ上がり、三代目で身上をつぶしてしまいます。今の日本の状態です。理性が遺伝するのなら、教育は必要がないわけですから、教育問題も発生しないし、日教組に日本をつぶされてしまうこともなかったわけです。

「生まれながらにして理性がある」とする欧米流精神論は大間違いです。精神は、知・情・意の三つからでき上がっています。情報→情報処理→行動

情報処理の部分が精神ですから、「知」で外部の状況と、それに合わせた状況を判断し、「意」で目的に合わせて情を調節し、「情」で行動させます。つまり、「正しく(知)、強く(情)、安定した(意)理性」を、通常我々は「精神」と呼んでいるわけです。

儒教ではこの三つを「知仁勇」としています。

「知、尽、勇の三者は天下の達徳なり」(『中庸』)

そして、正しく、強く、安定した状態を「誠」と言います。

「これを行う所以のものは一(いち)なり」(『中庸』)

「一」は「誠」です。

「誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり」(『中庸』)

物でも人でも、誠を身につけるのが道であり、「道を修むる、これを教えという」(『中庸』)

つまり、徳育です。徳育は技術を創ることですから、具体的なことで行動しなければ、技術はできません。その取っ掛かりが、灑掃・応対です。

応対については、人道そのもののトレーニングですが、「礼」の説明から入らねばなりません。「詩、礼、楽」というのは大変重要であり、しかも誤解されていることですから、また折をみて書くことにします。

「その次は曲をいたす。曲よく誠あり。誠あれば則(すなわ)ち形(あらわ)れ、形るれば則ち著しく、著しければ則ち明らかに、明らかになれば則ち動き、動けば則ち変じ、変じれば則ち化す」(『中庸』)

——曲は、具体的な技術。「文武両道でなくては大物にならない」ということです。

「君子の道は辟(たと)えば遠きに行くに必ず邇(ちか)き自(よ)りするが如(ごと)く、辟(たと)えば高きに登るに必ず卑(ひく)き自(よ)りするが如(ごと)し」(『中庸』)

徳育に王道なし。「致知より知止に到り、誠意より平天下に至り」についても、折をみて述べていきたいと思います。

安詳恭敬 (あんしょうきょうけい) (その 1)

「張横渠(ちょうおうきよ)先生曰(いわ)く、小児を教うるには、先ず安詳恭敬ならしむるを要す」(『小学』)

「安詳恭敬」には、教育を受ける者に必要な全てが含まれている。徳育においても当然不可欠であり、また、子供を安詳恭敬にするのも徳育の重要な目的である。子供のうちに安詳恭敬の能力を養っておかなければ、将来はなくなってしまう。安詳恭敬は、進歩のための重要な能力なのだから。

「人間という種は生物学的進化のある一つの産物である」
「人間は自然環境と生物多様性の土俵で発生し、そのため自然環境は人間の"宿命"の重要な部分である」——「以上の2つを考慮しなくては哲学も宗教も意味をなさないだろう」(『Naturalist』1994、Edward.O.Wilson——アリの行動を研究した偉大なる生物学者 20世紀の最も重要な思想家の1人と言われる)。

薪割りは徳育の一例であるが、「掃除」も「応対」も、そして「遊び」も重要な徳育である。子供の全ての行動は、徳育として行っていると思っても差し支えない。ただ、いい加減な掃除、形だけの応対、ゲーム等の遊びには、徳育のメカニズムはない。

横渠の言葉には具体的な方法論が、ウィルソンの思想には目的が述べられている。しかし、ウィルソンの思想は既に2,500年前に釈迦や孔子が到達したのと同じ答えなのである。しかも、2人ともその目的を自分自身で完成し、その方法論を「仏教」「儒教」として法則化し、単なる思想ではなく科学にまで高め、誰でもが到達できるようにしているのだ。

意志の強さが「安定」をもたらす

「安詳」の、まずは「安」から。「安」と「詳」は対になっている。同様に、「恭」と「敬」も対となって働く。

「安」は安定のこと。まずは丸太を安定させる。これがぐらぐら動いては、うまくいかないのは当たり前。次に、斧の軌跡の安定。そして斧を使う人間の安定。人間の安定は、肉体の安定と精神の安定の2つに分かれる。

「お習字は、…唯に技巧にあつたわけではなく…複雑なあの運筆を辛抱強く練習致しますことによって、精神力の抑制ということが練り鍛えられるものと思われていたからでございます。精妙な筆のあやには心の糸の乱れや不注意はおおうべくもなく表れますので、一点一画にも心を落ち着けて正確に筆を運ばなければなりません。このように、心をこめて筆を運ぶことを通して、私共子供は心を制御することを学んだのでございます」

「居心地よくしては天来の力を心に受けることができないということになっていましたので、火の気のない部屋でお習字を致しました。…お手習いは長い時をかけて、入念に致さなければならぬものでございますから、その朝(一番寒いと言われる寒<かん>の9日目)すっかり指が凍えてしまいましたが、振り返って後に控えていた"いし"(乳母)が紫色になった私の手を見つめて、すすり泣きしているのを見ますまで、それと気づかないのでした」(『武士の娘』)

この時、著者である杉本鉞子(えつこ)は5～6歳のはずだ。この齢にして現在の大人以上の集中力を発揮する。つまり、意志の強さもそれを発揮する力も既に充分備わっている。

安定させるのは意志の力とそれを発揮する技術の2つである。つまり、意志のハードウェアとソフトウェアである。この2つをトレーニングしなければならない。人間と他の動物の違いは、このソフトウェアの部分である。意志を永く続かせることができるから人間は進歩する。「安」は鉞子の言う通り、「天来のもの」。すなわち「徳」なのだから、鉞子は習字を手段として徳育をしている。

淳子(校長の長女)からの手紙にこう書いてあった。「晋平(スクールにいる小学5年生の男の子)は縄跳びの二重飛びで174回飛び、学年で1番になりました。朝早くから、夜シャワーを浴びた後9時ごろまで、学校でも休む間もなく練習。夜は部屋に入るとボーっとしている。晋平は今、身体を動かすのが楽しくてしょうがないんですね」。——庶民・晋平も順調に徳育を行っているようだ。

子供が動き回るのはこの徳育の為なんだから、部屋の中でゲームばかりしている子供や、テレビばかり見ている子供は将来ちょっと困ったことになってしまう。晋平も次は、習字のような静かなことに集中するトレーニングをするといいたいだろう。

好きであろうと嫌いであろうと、面白かろうと面白くなかろうと、やるべき事に集中できなければ、大人になってからうまくいかないからだ。

安定なくして、能力発揮はありえない

前かがみになって重い物を持つとひっくり返ってしまう。だから重い物を持つためには、まず身体を安定させなければならな

い。人間は安定しなければ力が出せないようになっているのだ。王貞治の一本足打法も、一本足で安定して立てるようになった時、完成した。大人2人で押しでも動かなかったという。

強い力士は必ず下半身が安定している。肉体も技術も、ハードもソフトも安定しなくては、その能力を発揮できない。

精神は知・情・意の3つからなっているから、それぞれを安定させる必要がある。安定させるのは意志なのだから、まず何よりも意志そのものを強くし、安定させることが必要なのだ。

知・情・意を安定させることができれば、正しく(知)、強く(情)、安定した(意)精神を創ったことになり、これが徳育の目的となる。正しくなければ安定しないし、強くなければ安定しないからだ。戦後教育は不正を教え、強さを否定したために不安定な子供がたくさんできてしまったのだ。

冬の戸外、子供達が寒さも忘れて夢中で遊んでいる。あの姿はハードウェアとしての知・情・意をトレーニングしているのだ。「武士の娘」のやり方は、ハードウェアとソフトウェアの両方をトレーニングしている。薪割りもハードとソフトの両方のトレーニングができる。

精神の場合、ハードは本能、ソフトは理性である。欧米流の精神論が賞賛してやまぬ理性は、本能という能力をうまく引き出す技術に過ぎないのである。正しく、強く、安定した本能から、正しく、強く、安定した理性を創ることができる。だから徳育は、まず、正しく、強く、安定した本能を創るところから始めねばならない。

安詳恭敬 (その2)

淳子(長女)が3歳の時のことです。家の前のアパートは外側に2階に上がる階段がついていますが、ふと見ると、その階戸塚ヨットスクールを支援する会

段の外側を淳子が上がっていきます。身体は完全に空中です。必死の形相で、手すりを支えている鉄の棒につかまりなが

ら2階までのぼりきり、よいしょと高い手すりを乗り越えてニッコリ笑いました。私は途中で声をかけるわけにもいかず、ただ、手を握りしめて無事を祈るのみでした。

私も3～4歳の頃、下駄を履いたまま木に登り、高いところから落っこちたと母がよく言っていました。子供はどうしてあんなに危ない遊びをするのでしょうか。それは、その遊びが先回述べた「本能のトレーニング」になっているからです。

危ない遊び、つまり身の危険を感じる遊び、もしかしたら死んでしまうかもしれない遊びを通じ、昔の子供達は強く・正しく・安定した本能を手に入れたのです。そして、これがなければ、強く・正しく・安定した理性はできあがりません。

淳子は我が子ながら強く、優しく、温かいと感心しますが、それはこのような遊びがつくり上げたのです。また、ヨットやウインドサーフィンはこのメカニズムを持っていますので、小さな子にやらせると、その子の将来のために大いに役立ちます。

「祖母は私を可愛がっては下さいましたが、古風なおの考えでは私の将来を理解して頂くことはできないのではないかと思います。が、その夜、祖母と話し合っていますうちに、武士の躰を受けた人は来るべきどのような事にも処してゆけるものだということを悟らせられました」「住む所はどこであろうと、女も男も武士の生涯には何の変りもありますまい」(『武士の娘』)。

江戸時代生まれの著者・杉本鉞子(えつこ)のおばあさん(実は曾祖母)は、鉞子がアメリカへ嫁入りするのに仰天するどころか、自信を持って送り出します。どこでも、いつでも、何をしても、誰とでもうまくやっていける。これこそ徳育の目的と言えますでしょう。

その結果として、(誠を買けば)「さすればお前はいつでも幸福になれましようぞ」(『武士の娘』)ということになります。徳育の目的は、「自分が幸福になること」でもあるのです。

「怒り」を集中させる

次は「安詳恭敬」の「詳」。

私は、スクールで時として生徒に講義をし、「一所懸命」を教えることがありました。「一所懸命」——「一生懸命」ではありません。

私「どのようにしたら一所懸命になれるか？」

生徒「？…」

私「今やっている事だけを考える」

生徒「なるほど」

クエの法則——「肉体は精神が望むことを実現しようとする」。

我々は何かを行おうとする時、必ず「うまくやろう」として行っています。ですから、今の行動に集中すれば必ず進歩します。「どうせ僕は何をやってもダメなんだ」と思っている負け犬、実に多いですね。彼らには、そろって「詳」の能力がありません。それぞれ、キョロキョロで集中できないのです。

薪(まき)を割る場合は、まず斧(おの)の歯を入れる部分を探し、そこをじっと見つめます。そして、態勢を整え、余分な力を抜き、息を止めてストンと刃を下ろします。

集中させるのは「意識」なのですが、主なるものは「感情」です。それも、「怒り」を集中するのです。ここに「恐怖」が混じってくると失敗してしまいます。「もしかするとうまくいかないかもしれない」——これが、不安(恐怖)を発生させますから、それが混ざると、クエの法則により、失敗してしまうわけです。

下手なうちは必ず恐怖が混じります。技術ができ、怒りのみを集中できるようになった時、我々は「自信ができた」と言います。

「定まって后(のち)能(よ)く静かに…」(『大学』)

「静かに」は強い感情、特に怒りが安定した状態です。「詳」ですね。そのための定、集中力です。諸葛孔明の『子を戒むる書』を見てみましょう。

「静もって身(心)を修め、…寧静(ねいせい)に非(あら)ずんば以(も)って遠きを致すなし。…静に非(あら)ずんば以(も)って、学を成すことなし」「年、時と与(とも)に馳(は)せ、意、歳と与(とも)に

去り、遂(つい)に枯落と成り。窮慮に悲歎(ひたん)するとも、
将(は)た復(ま)た何ぞ及ばん」

意志の強さが「安定」をもたらす

子供の時に「安」と「詳」を創りそこなうと将来がなくなってしまいます。我々はスクールで、将来どころか、既に現在がダメになってしまっている子供達をいやというほど見て来ました。「逆もまた真なり」——「安」と「詳」はこの関係にあります。

実験をしてみましょう。片足で立って靴下を履きます。バランスが少し崩れてぐらついたら、つま先に意識を集中します。するとぐらつきがピタリと止まります。「安」「詳」がある程度できる人なら、必ずこうなります。安定しなければ一所懸命になれないけど、一所懸命になれば、当然のごとく安定してしまいます。

「安」と「詳」は、このように一対となっているものです。この事実は次のように考えられます。安定するという行動は、恐怖が行なわせる、と思われれます。靴下を履くという行動は、怒りがさせますから、怒りはそこに集中し、バランスを取るという行動には無意識に恐怖が集中するからでしょう。靴下の方に恐怖が混ざったり、バランスの方に怒りが混ざったのでは、一所懸命とは言えません。

不快感を悪いものと思っておられる方も多いことですが、「あるものは全て善」です。あるものを「徳」と言うわけですか

ら、徳は善です。「快を求め不快を避ける」、これが人間の行動原理ですから、不快感がなければ人間は行動しません。不快感は人間を行動させるエネルギーです。恐怖、驚愕、怒りを毛嫌いするような事をせず、しっかりトレーニングして、強く・正しく・安定させておかねばなりません。

欧米精神論は、どうしても感情を悪いものとして無視するようですが、感情を嫌う、その感情をどう説明するのでしょうか。一口に言ってしまうと、「本能は正しいが理性は間違っている」が東洋式、「理性は正しいが本能は間違っている」が西洋式精神論です。理性を絶対のものとしたアリストテレスの"夢"を、西洋はまだ引きずっているとしか思えません。

孟子の性善説の「性」は、「天の命ずる、これを性という」(『中庸』)の性ですから、「本能は正しい」と言っているわけです。この点、「性悪説」は間違いとなります。性が悪なら、人間はとくに滅亡してしまったことでしょう。性じゃなしに、「理性」が悪なのです。

『般若心経』の「照見五蘊皆空(しょうけんごうんかいこう)」の「照見」は、原文では「正見 = 正しく観察し、正思 = 正しく法則化した」となっています。仏教も儒教も、このようにデータを集め、法則化するという、科学的方法を採用しているの、信用できるし、かつ、実用的なのです。

「古い」とか「けしからん」とか、妙な否定の仕方は厳に慎まねばなりません。一方、その良さを説こうとする者も、科学的に説明しなければなりません。

安詳恭敬 (その3)

「安詳恭敬」は進歩の法則ですから、子供の進歩を願うなら、子供のうちに安詳恭敬の能力を高めておかねばなりません。安、詳については総論的に述べたように、主として感情と意志の使用法となります。安、詳は相関関係にあり、マルクスの言う相互浸透で進歩していきます。

靴下を履く例で述べた通りですが、もう1つ、ウインドサーフィンのセールアップで見てみましょう。

ウインドを始めた者が、先ず最初にぶつかる壁がセールアップです。水に浮いた不安定なボード。立つことさえやっとなのに、更に、水につかった重いセールを立てる、というのだから大変です。

「腰に力を入れる」「背中から引け」「まず、ボードに立つ練習をしなけりゃ無理だ」「目は水平線」…色々なアドバイスが飛んできます。

どうしてもうまくいかない人は、アップホールライン(セールを引っ張り上げるロープ)を握っている手の平に、意識を集中します。"怒り"を集中するのです。すると、あれほど重かったセールが楽に上がり、水に落ちないという不思議なことが起こります。これは、安、詳の相関関係の応用です。

安定しなければ全力を出せない。だから、身体が不安定だとセールが重くて上がらない。この相関はありがたいことに、"逆もまた真なり"なのです。つまり、「全力を出せば安定する」のです。怒りも力も、つまり、精神も肉体も、手の平に集中できれば、肉体は慌てて安定してしまいます。

この時、「落ちるんじゃないか」とか、「どうせできやしない」とか、「人が見ていて恥ずかしい」とか考えていると駄目。淳子(長女)の階段のぼりの例のように、他のことを考えずに必死になって一所懸命やらなければなりません。

子供の危ない遊びは、安、詳のための、ハードウェアのトレーニングに思えますね。

「君子の行は、静以って身を修め…寧静(ねいせい)に非(あら)ずんば以(も)って遠きを致すなし。…静に非ずんば以って学を成すことなし。…険躁なれば則ち性を治(おさ)むること能はず」(諸葛孔明『子を戒むる書』)

——「寧静」とは安詳のこと。孔明ほどの人がそう言っているのですから、我々は信じるべきでしょう。

不快感が、人間を進歩させる

仏教のトレーニング方は八正道(はっしょうどう)で、その中でも「正念(しょうねん)」が一番重要です。ひたすら、自分の精神を観察し、それに怒りを集中するのです。試しに、ウインドをしている時に、行動と感情の関係を観察してみます。

風が良くて快調にプレーニングしている時は、「快感」と「怒り」の2つが湧いています。そこへ、一陣の突風が吹いてきて、飛ばされそうになります。するとまず、「驚愕」が湧きます。これは、急いで行動を変更せよ、という合図です。次にすぐ、「恐怖」が湧き、腰を引いたり、セールを緩めたりしてバランスを取り直し、安定します。そしてまた「怒り」が湧いてきて、その強い

風でうまく走ろうとセールを引きなおし、バランスを取り直します。気がつけば、今まで走れなかった風の中で走っている。

この時には、「快感」「恐怖」「怒り」「驚愕」が混じっていますが、これを繰り返してトレーニングしていると、やがて、この風でも「快感」と「怒り」の2つだけで走れるようになります。つまり、進歩したのです。

このように、3つの基本的な不快感(恐怖、驚愕、怒り)が絡み合って、人間を進歩させますから、不快感を発生させる能力が大きければ、それだけ大きな進歩が期待できます。

大人は子供を叱ることにより、子供を進歩させようとしています。叱られた子供は、突風を受けたウインドサーファーと同じメカニズムで進歩のためのトレーニングをするわけです。

不快感の弱い子供達

「驚愕」の弱い子は、なかなか新しい行動に移ろうとしません。つまり、グズで怠け者です。よく、スポーツ選手は、引退の時に「感動をありがとう」と言います。また、学校の先生が夏のキャンプ等で、「みんなを感動させるんだ」と演出を凝らしたりします。みんなが感動を求める、ということは、世の中に、感動が少なくなっているからでしょう。

本来、感動は人にさせてもらうものではなく、自分でするものです。ウインドで突風を乗り越えて走れるようになった時、我々は自分に感動します。「やったー！」という、あの快感が、次の快感を求めるチャレンジ精神を創ります。そのために、感動があるのです。「快を求め、不快を避ける」です。感動はその前提として、必ず「驚愕」があります。驚愕の弱い人は感動する能力も弱いのです。

「恐怖」が弱い人は、猪武者になりやすく、平気で実力以上のことをしようとして失敗します。時には、生命を失ってしまうほどに。攻撃型の性格の人は、十分に感情を強くしておかないと危険です。甘やかされた二代目タイプ。コマーシャルじゃありませんが、「伸びる前には縮むもの」。足元を固め、体勢を立て直して、次の行動に移らせます。

「怒り」が弱いと、臆病者、負け犬、チャレンジ精神が足りない！…等と罵倒されてしまいます。人間を進歩させるのは「怒

り]ですから、こう言われても仕方ありません。逃避型の性格の人は、感情が弱いとこうなりやすいので、感情のトレーニングを怠らないようにしなくてはなりません。親は責任を持って、子供の感情を強くしてやりましょう。

「叱るより誉めろ」「言って聞かせろ」と、つまらないことを言う人達がいいます。安、詳の立場から、これはナンセンスです。欧米流の、「理性はある」から来る結論なんでしょうね。理性を

創ることを"進歩"と言うのですから、生まれながらに理性があると考えている人達にとっては、子供の進歩など不要です。

叱ると、子供の3つの不快感は、前述の経路をたどって子供を行動させ、進歩させます。叱る目的は、子供に不快感を発生させることです。だから、こちらも感情を込めてやらねばなりません。感情を込めずに叱るのは、子供に失礼な行為と知るべきです。

安詳恭敬 (その4)

「安詳」の総論を話しましたので、今回は「恭敬」の総論を述べておきましょう。大事なのは各論なのですが、なかなかそこまで行きません。

「恭敬」は、「目標設定」のこと。恭敬こそ、人間のみが他の動物に優れて持つことができるものでしょう。これがあるからこそ、人間は「進歩したい。進歩しよう」と思います。

「恭」は、己の本質を知ること。「敬」は名人の本質を知ることにより、生まれます。薪(まき)割りのように、同じ行動をしてみた時に、己の駄目さと名人の素晴らしさを実感し、恭と敬が同時に生じます。そして、名人を師と仰ぎます。「この人に教えてもらおう。この人に学ぼう」とするのですね。

仏教では、教育の総論を「開示悟入(かいじごにゅう)」としていますが、この「開」は、「学ぼうと心を開く」ことですから、恭敬の状態のこと。「仰いで尊くない」先生は、始めから教育者の資格はありません。だから、教育崩壊が起こるんですね。だいたい、先生と生徒が「オトモダチ」では、恭敬は生じません。

価値観と時間の流れが「進歩欲」を創る

「理性とは技術なり」と何度も言いましたが、精神的技術のみならず、肉体的技術も当然、「理性」です。素晴らしい職人技も、野球選手のファインプレーも、おじいさんの薪割りも、我々が自転車に乗るのも、サーカスの熊がオートバイに乗るのも、全て「理性」であり、自分で創ったものです。

熊にも理性がある、という、アリストテレスはかんかんになって怒るでしょうね。「それは技術知だ」と言うことでしょう。しかし、熊と人間の理性には、歴然とした違いがあります。熊は、何もオートバイに乗りたいと思ってトレーニングしたわけではありません。が、我々は、自転車に乗りたいと思って練習しましたよね。それは、自転車に乗れるようになることが、我々にとって「価値」だからです。

我々は、価値を目標として設定します。もう1つは「将来」。努力の結果が出ることを予想できるからです。熊は、「価値観」もなければ、「時間の流れ」もよく分からないから、自分で進歩しようとは思えないのです。

恭敬は、人間が持つ、素晴らしい価値観と、時間の流れを知る能力から生じます。訳の分からない平等思想から恭敬を否定した、考える力のない一派が教育を乗っ取ったから、日本は傾いてしまったのです。

恭敬は、我々に「恥」を生じさせます。恥という感情は、「進歩しよう」という強烈な意志を発生させます。これが、「安」につながり、「詳」につながってトレーニングが行われるのです。安詳恭敬は、人間性の重要な一部であり、この能力を強化しておかねば、その人の将来はありません。これが徳育の基本、いや、徳育そのものと言ってもいいでしょう。

「叱るより誉めろ」の教育は、恭敬の能力を奪ってしまいます。ヨットスクールにたくさんやって来た、「自己愛型人格障害」の子供達、「反社会型人格障害」の子供達、その他の、人格障害の子供達も、「叱る」や「体罰」をタブー視したマスコ

ミ論調の犠牲者です。人格障害については、また、機会をみて述べたいと思います。

スクールにやって来た子供達の中で、もう1つ、度肝を抜かれたのは、時間の流れを感じる力のない子供達です。2歳位の子供は、時間の流れがよくつかめません。「昨日、明日と言ったから今日のことだよ」なんて言うと、こんがらがってしまいますね。この状態から、進歩しない子がいるのです。

この位の歳から、他の子と遊ばなかった子供に多いのですが、彼らに、「そんなことで将来どうする」と言っても無駄です。将来という未来の概念自体ができてないのですから。このような、恭敬の能力のない子供は、進歩については熊並です。「自主的」に進歩する能力がありません。

「自主性」も創るもの

よく、「叱ってばかりいると自主性がなくなる」とか、「体罰は自主性を損なう」とか言います。自主性とは何かが分かっていないから、こんなトンチンカンなことを言い出すのでしょう。欧米

かぶれば、自主性があると思っています。が、とんでもない！自主性も、やはり創るものなのです。

自主性の目的は進歩です。ですから、進歩する能力ができた時、初めて自主性ができたと言います。自主性と安詳恭敬は同じものです。恭敬からは、「礼」という非常に重要な問題が出てくるのですが、これはまたの機会にしましょう。

左翼思想の人達が「敬」や「礼」を嫌うのは、訳の分からぬ平等思想もさることながら、「エライ人がいい気分になるのはけしからん」という、いかにも小人物的なけちくささが見えます。しかし、ここで述べた通り、「敬」は自分の進歩を目的として湧いてくる感情なのです。自分の行くべき目的地を示してくれませぬ。これに、自分の真実の姿を見る力、「恭」が加わって、「進歩したい、進歩しよう」とする強烈な意志がでかかります。これが自主性でなくて何でしょうか。

「恭」は自分を卑下することではなくて、自分の今の実力を知ること、「敬」は名人の実力を実感すること。いずれも、自分の利益のために生じます。子供のうちから、恭敬の能力を高めておかねば本人にとって損なのです。

長崎・駿ちゃん殺害事件

長崎で、4歳の男児・駿ちゃんを連れ去り、突き落として殺害した「12歳少年」については、問題を2つに分けて考えなければなりません。

- (1)対人関係の理性が3歳児程度であること。
- (2)本能が完成していないこと。

今回特に問題となるのは、(2)の本能の方です。

対人関係の本能は、「生まれつきある」というよりは、必要に応じて「解発される」ものの方が多いと思われます。特に重要な本能である「罪の意識」は、子供が何か悪いことをした時、

ひどく叱られるとか、体罰を受けるなどといった刺激を受けることによって解発されると思われます。

悪いことをしても罰を受けなかった場合、子供(幼児)は、わざと分かるような悪いことをして罰を受けようとしています。「罰を請う」行動をします。それでも罰を与えないと、子供は訳もなく不安になってきます。オドオドするようになります。

「罪の意識」は社会に出て行くために非常に重要な本能で、悪いことをしても悪いと思わない人間は、社会のつまはじきとなります。12歳の少年も、明らかに「罪の意識」を解発し損なっています。

「叱るより誉めろ」の教育は、マスコミと日教組によってデフォルメされ、「叱ることは悪」となっていました。「体罰なんてと

んでもない」と、よく言われたものです。そして、このマスコミ論調は、一部の母親に絶好の口実を与えてしまいました。父親、学校、友達、社会の「暴力」から、自分の「子供を守る」と称して、溺愛してしまったのです。

当然、父親から叱られず、学校で罰を受けず、友達にもいじめられない子供には、「罪の意識」は生じません。すると、なんと社会に出たり、友達と付き合うのが怖くなってしまいます。なぜなら、自分に「罪の意識」がないということは、他人にもないということだからです。つまり、「他人は自分に何をするか分からない」、そう感じるようになるのです。

真犯人は、やはりマスコミと日教組

何度も言っていますが、欧米流の精神論は間違っています。その間違いの重要な1つが、「本能論」のないことです。教育は精神論に基づいて行われますから、間違った精神論から、「叱るのは悪」などという訳の分からない教育法が出てくるのも仕方ありません。

酒鬼薔薇聖斗(サカキバラセイト・神戸の連続児童殺害事件犯人)の時も、宅間守(大阪・池田小学校での児童殺傷事件犯人)の時も言いましたが、彼らはあなりたくてなったわけではありません。マスコミと日教組の責任で、あなってしまったのです。しかし、本当の責任者は決して責任を取りませんし、我々も責任を追究しません。悪い権力者を交代させる制度が民主主義なのですから、日本に民主主義はないということになります。

「12歳少年」に関するマスコミ論調を見ると、最初に書いた(1)の理性の創り損ないばかりに焦点を当てているのに気づかれます。アメリカ流の精神論を取り入れ、それだけが正しいとして50年以上が経過してしまったために、今や誰にも訳が分からなくなってしまっているのでしょう。

私が「脳幹論」を提言したのは16年も前のことです。あの時点でちゃんと取り上げてくれていれば、今度の事件だって起きずに済んだはず。「専門家」にとって、日本人の、しかも現場の人間の意見など、検討に値しないのでしょう。

我々はどう考えても「政治犯」ですね。権力者に都合が悪いので、「いかに活動させないか」に重点が置かれているようです。

サルトル、ボーヴォワールの誤り

『ソフィーの世界』(ヨースタイン・ゴルデル著)を読んでいると、どうしようもない苛立ちに駆られます。

ヨーロッパ哲学は、ついに正しい精神論を創り出せなかった。東洋では2千5百年も前に完成しているというのに。その上、こともあろうか、日本ではその間違った精神論が幅をきかせてしまい、今の経済、教育の惨状をつくってしまった。それでもまだ、日本の指導者達は気がつかない…。本当のインテリじゃあないんですね。

NHKラジオで「子供と教育・電話相談室」というのをやっていたのですが、今でもあるのでしょうか？

ここで、相談を受ける女性カウンセラーの答えはいつも同じです。

「自由にさせておきなさい。抑圧するからいけないんです」

——彼女らは、「生まれながらにして理性がある」という立場に立っています。理性はあるのに、それが出て来ないのは抑圧しているからだ。自由にして理性が出るようにしてやれば、学校へ行く、非行もしない。

このペテンを真に受けて、子供達はみすみす時間を浪費してしまうのです。「理性は創るもの」であることを知っていれば、

こんなアホなことを言って犯罪行為をすることもないでしょうに。
間違った精神論が日本を駄目にしていくな一例です。

人間の本質や、自由についての見解

『実存は本質に先立つ』(サルトル)

「人間の本質とは、人間は本来これこれこういうものである、という定義だ。サルトルによれば、人間にはそういう本質はない。人間は自分をゼロからつくらなければならない。人間は自分の本質をつくらなければならないんだ」(『ソフィーの世界』)

『人間は自由の刑に処されている』(サルトル)

「自由は人間にとっては運命なんだ。人間は自分で自分を自由であるようにつくったわけではないから…自由な個人にしてくださいって、だれかにお願いしたわけじゃない…なのにぼくたちは自由な個人であるのだ、そしてその自由のために、ぼくたちは自分でなにかも決めるように、死ぬまで運命づけられている。頼りになる永遠の価値も基準もない」(『ソフィーの世界』)

「サルトルの妻、ポーヴォワールは言う。女性の本質も男性の本質もない。…女性はぼくたちの文化のなかで初めて『第二の性』へとつくられる。この文化のなかでは男性が主体だ。女性は客体にさせられる。……女を抑圧しているのは男だけではない。女は、自分で生きていく責任をひきうけないかぎり、自分で自分を抑圧しているのだ」(『ソフィーの世界』)

これらの文章からすると、2人とも「理性はある」からは脱却していますが、サルトルは理性を「創るもの」と能動的に考え、ポーヴォワールは「できるもの」と受動的に考えているように受け取れます。が、彼らの原本を読んだわけではないので、真実は分かりません。ご存知の方は教えて下さい。

本能論のない精神論は間違っている

2人の共通の間違ひは、「本質がない」というところですよ。サルトルは「ゼロからつくる」と言うけれど、無いものからは何もできません。本能論がないから、こんな間違いをしてしまうのでしょ。儒教、仏教を読んでごらんください。実にうまく本能論を利用しているのが分かります。そして、サルトルが「無い」と言った「頼りになる永遠の価値、基準」もちゃんと書いてあるんですよ。

このように、西洋思想はその基礎に間違いがあることが多いので、盾につばをつけながら読まねばなりません。そんな人がいるかどうか知りませんが、ポーヴォワールに触発されてフェミニズムに走ったとしたら、それは間違いですよ。

そういえば、教育界で行われようとしているジェンダーフリーはとんでもないことですよ。こんな風に、精神に関する事で英語で言われているようなものは、まず「アヤシイ」と警戒してかかる必要があります。マスコミは、英語でさえあればすぐ平伏してしまうので、信用しないようにしましょ。

サルトルは「自由」の意味も分かっていないようですよ。これも本能論がないからですよ。ローレンツの『攻撃』を読むと、自由の意味が実に的確に(ただし、遠慮がちに)述べてあります。儒教も仏教も完全に自由になることを目的としていますが、自由もやはり創るものなのですよ。

以前述べたことのある、ウィルソンの言葉をもう1度思い出してみましょ。

「人間は進化の結果生じた。人間は自然の一部である。この二つを考慮しなくては、哲学も宗教も意味をなさない」

すなわち、サルトル、ポーヴォワールは間違いであり、儒教、仏教は正しいんですよ。

獵師の子「サーティ」

昔々、シャーリーブトラ(舍利子)が街を歩いていると、前から何とも言えず立派な人がやって来ました。

「あなたの師はどなたですか？」——「お釈迦様です」

「何を説かれますか？」——「因縁です」

この話を読んで、私は仏教をやってみようと思いました。

「因縁」とは「科学」ということです。仏教は宗教ではなく、科学的な精神論に違いない。それなら教育に使える。そう思ったのが 20 年前、名古屋拘置所に放り込まれた時でした。

保釈後、ヨットスクールで仏教(儒教も)に書かれている"法則"を、現場で応用してみて、全くその通りであることを確認することができました。生徒達にも説明してみたのですが、みんな半信半疑で聞いていました。宗教としての仏教のイメージがあまりに強いので、科学的な精神論であると言われてもピンと来ないのでしょう。

その際たるものが、「輪廻転生」ではないでしょうか。我々が考えている輪廻転生は、科学とは程遠い精神世界の話ですよ。仏教界で、いつ頃から今のようになったのかは知りませんが、輪廻転生は「ソフトウェアは消えない」ということなのです。

小学生の頃、誰もが自転車に乗れるようになります。自転車に乗る技術(ソフトウェア)を自分で創ったからです。それから全く自転車に乗らず、数十年経ってから試してみると、やっぱり乗れます。1 度創ったソフトウェアは消えないのです。そして、正しくない技術(= 癖)も、つくってしまうとやはり消えません。これが問題となるのです。

定義も知らずに真理を潰す"権威"

さて、中阿含経に、サーティ経というお経があります。内容は、獵師の子・サーティが、「輪廻するのは"識"であり、お釈迦様もそう言った」と主張するのを、他の比丘(びく)とお釈迦様が「因縁」を持ち出し、「それは間違いだ」と諭し、かつ、罵倒するというものです。

このお経の裏側には、その当時の論争があり、権威側は「"識"が輪廻するのではない」と結論づけ、お釈迦様の名前を

使ってサーティ的な考えを潰してしまったのでしょう。しかし、どう考えてもサーティが正しい。"識"が輪廻するのです。権威側は、「では、何が輪廻するのか」を答えていません。

何より、一番大きな間違いは、「"識"とは何か」を知らないことです。"識"とは何かを知らず、「それは"識"じゃない」と言ったところで、全く説得力はありません。民主主義の定義もできないマスコミが、「ヨットスクールは民主主義に反する」と言ったり、人権の意味の分かっていない裁判官が「ヨットスクールは子供の人権を無視している」と断罪したりするのと同じことです。

私はサーティに親近感を感じますが、それは「獵師の子」という現場を示唆した言葉と、間違った権力者が、正しい個人を力で圧殺したという事実です。

お経の中で、権威側は言います、「識、縁あれば則ち生じ、縁なければ則ち滅す」と。例えば、目で(因)物を(縁)見る(行)から眼識が生ずるのだから、物(縁)を無くせば、眼識が滅するというわけです。

が、これは眼識の意味を間違えています。そのまま放っておいても無くならないのが識ですから。

「人はいかに物を見ているのか。実は、物それ自体を見ているのではなく、あなたの脳が創造性を働かせながら、視覚の世界を意味あるものとして構築しているのだ」(『視覚の文法』ドナルド・D・ホフマン)

この、視覚を構築するソフトウェアのことをお釈迦様は眼識としたのです。21 世紀になってやっとまとまった知見を、インドでは紀元前 5 世紀に既に知っていたこととなります。瞑想というのは、このように自分の肉体も精神も正しく観察し、理解することができるのです。儒教でもそうであったように、「己を知る」は、トレーニングの基本です。

「癖」を「技術」に変えれば、「苦」がなくなる

その他、サーティ経には漢訳の際に重要な部分に間違いがあり、そのまた日本語訳には訳の分からぬ部分ができてしまっています。

「生ずる物は、必ず滅する」——ならば、なぜなくなるのか"苦"があるのか。この答えを見つけるために、お釈迦様は出家し、トレーニングに励みました。そして、知的な方法(瞑想)で答えを見つけ出します。

- (1) 無くならない苦とは何か
- (2) 苦の共通項は何か
- (3) その共通項を滅すればよい
- (4) その方法が八正道(はっしょうどう)である

仏教の基礎、四諦(してい)、八正道です。

間違っ作ってしまったソフトウェア、癖、理性、これが「我(が)」で、これにより、"苦"が輪廻するのです。ならば、癖を正しい技術に直せばいい。剣道や柔道をやった人なら、「型」の練習として、癖を技術に変えることを知っていますね。仏教の型は「無明(むみょう)」を「明(めい)」に変えること。「明」が「空(くう)」なのです。正しい考え方を繰り返すことで、間違っ理性である「我」を、正しい理性である「空」にしていきます。それを、瞑想(正念・しょうねん)で行うのです。

お釈迦様は、「とにかく行動しろ」と言います。行動しなければ、正しさは実感できず、おかしな方向に曲がってしまいます。実効力のない権威は、マスコミと同じになってしまうのです。

コアラに学ぶジェンダーフリーの非人道性

淳子(長女)から手紙がきました。

「コアラの発情期に、オスがメスに言い寄った時、メスコアラは何て泣き声を上げると思う！ 『イヤー、コナイデ〜』って言うんだよ！ これ本当！！…本当なんだもん。。。」

私も本当だと思います。時間を数億年さかのぼってみましょう。

生物の特徴の1つに、「自己の複製をつくる」というのがあります。分裂などによって自己の複製をつくっていた単性生殖から、雌雄のつがいによる両性生殖に進化した時に、生物がどうしても解決しなければならなかった大問題は、「どのようにして相手をオスまたはメスと見分けるか」ということでした。ホモやレズでは、種族保存は図れません。

「自然は常に最良の解決策を見つける」(『風の谷のナウシカ』)。

この時に自然が見つけた方法は、まさにあつと驚く方法でした。

動物の4大本能と言われるものは、「食、性、攻撃(怒り)、逃走(恐怖)」ですが、このうち、「性」と「怒り」が混じり合

えるのがオス。「性」と「恐怖」が混じり合えるのがメスです。この方法ですと、オスとオス、または、メスとメスがつがうということは完全に避けられます。オスの方がメスより強い動物には素晴らしい方法です。

その後、進化が進んでも、この方法は多くの動物に残り、コアラも人間も採用しています。

「Is he tall?」(彼は背が高い?)——38年前にアメリカへ初めて行った時に聞いた話です。「私恋人ができたわ」と友達に話した時、最初に聞かれる言葉だそうです。背の高さは強さの象徴ですから、男にまず強さを求めるのは本能的にならずけることです。

可愛くない、「ジェンダーフリー」の申し子達

人間の無数にあると思われる本能の、たった1つですが、非常に重要な「性」の本能。ここには歴然とした男女の差があり、これを壊してしまうと、種族保存が危うくなってしまいます。「ジェンダーフリー」教育は、誠に大きな危険をはらんでいると言えましょう。

「天の命ずるこれ性と謂(い)い、性に率(した)がうをこれ道と謂い、道を修むるをこれ教と謂う」(『中庸』)——これが徳育なんです。これが人道です。

ですから、ジェンダーフリー教育は非人道的です。仏教で言えば、「無明(むみょう)」教育です。行きつく先は、「苦界」をさまよう「輪廻転生」です。

『サルトル、ポーヴォワールの誤り』の回で言ったように、欧米の精神論は基本的なところに間違いがあることが多く、肩につばをつけて聞かなければなりません。なのに、100%信じ込んで実行してしまう日本の指導者というは、いったい何なのでしょうね。「欧米の精神論には本能論がない」ということを、肝に命じておかなければなりません。

人間の場合、「性」は何も子供をつくる為だけの行動ではありません。一例を挙げるなら、男は抱いた女に対し(その結果できた子供に対しても)、責任感が湧いてきます。食、物、安全の保証をしようとします。

魚釣りをする人は、獲物を全て家に持って帰ろうとします。ヨットやウインドサーフィンをしていると、家族が危険な目に遭っ

ていないか、気になって仕方ありません。他の子供達も同じように海の上にいるのに、自分の子供に目がいってしまいます。他にも、そんな例はいくらでもありますね。

「可愛がる」というのは、強い者が弱い者を可愛がるのであって、逆ではありません。強い女も、強い子供も可愛くはありません。これは本能だからどうしようもないのです。男は女子供が可愛いから守ろうとし、いい物を与えようとします。喜ばせたいから出世しようとします。その為に、一所懸命に働きます。可愛くなければどうでもいいんです。誰も喜んでくれる人はいないのでから。

男がこうなったら、日本はおしまいですね。女が強くなる世の中ですから、男はもっと強くならなければなりません。女に甘やかされて喜んでいる男の子には、将来はありません。近頃、多いですよ。ヨットスクールにもこの手の子はたくさんやって来るし、変な事件を起こして新聞沙汰になるのも、このタイプが多いです。

マスコミはアホだ。マスコミがちゃんとしていれば、ジェンダーフリーなんか採用されないだろうに。

六芸 <射、御 I>

「孔子の弟子 3 千人。うち六芸(りくげい)に通ずる者 72 人」(『史記』)

この 72 人が、孔子の高弟です。「六芸の名人でなければ君子になれない。大人物じゃない」ということになります。

儒教は、「修己治人(自分を大人物にして、指導者になる)」が目的です。大人物でなければ指導者にはなれません。小人物が指導者になると、一般人は被害をこうむります。

今の日本の 4 大権力者(=司法、立法、行政、マスコミ)が小物だから、教育も経済も崩壊し、社会不安が増してきました。指導しようせず、支配しようとするのが小物の特徴ですから、たまったものではありません。

小物を大物にするのが「徳育」です。日教組は、徳育の意味も目的も内容も知らずに否定し、文部省(現文科省)がそれを黙認したため、大物が育たなくなりました。マスコミは日教組を褒めたたえ、政治家は知らん顔をし、司法は味方しました。

我々一般人も、大物にならなくてはなりません。大物でなければ、自分の持ち場をまっとうできないし、本当の幸福もつかめません。徳育は、教育を受ける者全てを、大物にしようとしているのです。

大物になるための、6つの技芸

六芸は徳育です。このことは、「新割りは徳育」をお読み頂いた方には、すぐお分かり頂けるでしょう。大物は、「文武両道」「知行合一」でなくてはならないからです。幼少時から東大合格を目指して受験勉強に明け暮れた者が、大物になれるはずもなく、その「勝者」が権力者になるのですから、我々はたまったものではありません。

周の士君子が身につけるべき、基本的教養として課せられた6つの技芸。つまり、「礼、楽、射、御、書、数」。これを六芸といい、孔子が理想としたものです。礼儀、音楽、弓術、戦車術、書道(国語?)、数学のこととされていますが、それぞれの目的を考えると分かりやすいでしょう。

「安詳恭敬」が「進歩の法則」であることは、既に説明しました。六芸も安詳恭敬にかなっています。「礼」「楽」は話が面倒になるので、まず「射」「御」から。

達巷村の人が言った。「孔子はどうしてあんなに何でもできるんだろう。いったい、どれが専門なんだろう」

孔子が笑いながら弟子に言った。「射にしようか。御にしようか。そうだ、御がいい」(『論語子罕(しかん)』)

孔子は何でもできる人だったけど、射と御、特に御がお気に入りだったようです。

射、御、ともに意志と感情のトレーニングになります。射は主にソフトウエア(理性)を、御は主にハードウエア(本能)をトレーニングすることを目指しています。安詳の最高のトレーニングですね。

射は武器の練習で、危険が伴います。目的は、ウインドサーフィンなどで創った感情と意志を、実地に応用すること。「ク工の法則」の確認でもあります。

スクール生には、射のトレーニングをするように言っておきました。これは、「パチンコ」でできます。的を作り、そこに感情を集中させて玉を放つ。「狙う」のではなく、当てようと「思う」だけです。完全に集中できれば、的が浮かび上がってきます。

御は、戦車を自由自在に操る名人になることです。が、車といっても今の車とは全く違い、当時の車はタイヤもスプリング

もオイルダンパーもありません。それで道なき道を走れば、でこぼこや石のショックを拾って跳ね回ることでしょう。御者は、落ちないように必死でつかまりながら、しかもそれを制御しなければなりません。大変なことでしょう。

「御」で本能を鍛える

「恐怖、驚愕、怒りとウインドサーフィン」のところでも言ったように、「死の恐怖」という最も質の高い恐怖を上回る「怒り」を発生させなければ進歩は有り得ません。また、その怒りを制御する強い「意志」も必要です。車に乗るといって戦々競々を繰り返した御の名人の、本能のランクの感情と意志は、最高の状態になっていることでしょう。おまけとして、判断力、習得論、脳と肉体の健康も手に入ります。そして、本能のトレーニングであるだけに、終わった後に最大の満足感、幸福が味わえるのです。孔子が、「専門家になるなら御」と言ったのも頷けます。

スクールで利用している小型ヨットやウインドは、このメカニズムを持っているために、教育効果が上がります。こういうことは、欧米流の精神論では歯が立ちません。儒教によく「戦々競々」という言葉が出てくるのも、意味があることです。

オートバイでスクランブル(不整地走行)のトレーニングをして、うち(戸塚ヨット)と同じ効果をあげている所話を聞いたことがあります。まさに「御」ですね。

このように、御は主に本能のトレーニングをします。本能が強くなければ、教育はうまくいくはずがありません。

ウインドをやっていると、己が分かってきます。具体的な能力、その正しい評価、他との比較。己が分かり、他と比較できるということが、「恭敬」の能力を創り、「礼」「楽」へとつながっていきます。

「曲(きよく、技の変化)能(よ)く誠(まこと)あり。誠あれば則(すなわ)ち形(あらわ)れ、形るれば則ち著(し)く、著しければ則ち明らかに、明らかなれば則ち動き、動けば則ち変じ、変ずれば則ち化す」(『中庸』)

才勉強ばかりでは、決して大物になれません。まずは「灑掃(さいそう)」から。

六芸 <射、御 II>

儒教の目的は「進歩」にあります。まず人間性を進歩させ、その人間性を使って社会性を進歩させる。その社会性で、国の指導者となる。"修己治人"です。「国の政治は、大物、大人物でなければならない」ということでもあります。

進歩は「行動」抜きにはあり得ません。才勉強ばかりしては、大物には決してなれません。大物は、必ず文武両道なのです。

進歩するということは、力が強くなるということでもあります。日教組は、「強さ(力) = 武力 = 暴力 = 悪」という、訳の分からない公式を作り上げました。そして、力を否定し、道德教育までその公式に取り入れて否定してしまったため、日本は強い者を育て損ないました。当然、最も弱い者が東大を出て権力者となり、日本は衰退に向かっていきます。

「力」は群れのためにあります。溺れた子供を助ける人は水泳力が強く、まずその力を自分が溺れないために使います。そして、余力で子供を助けるのです。弱い者は人の役には立てません。これが、精神の弱さとなると致命的です。「人のために」という気持ちが、全く起こらないのです。弱い者は、自分のことで精一杯ですから。

ヨットスクールでは、精神的に強くなることを第1の目的にしています。生徒に対し、「ある時、ふと、『他人のために』と考えていたら、それはおまえが強くなってきた証拠なんだ」と教えていました。

「権力者」の「権」という字は、重さを測る「おもり」の意味であり、「はかる」の意味。おもりは重量によって変えますから、「臨機応変」の意味があります。

「未だ与(とも)に権(はか)るべからず」(『論語子罕(しかん)』)

権力者とは、力を正しく、自由自在に使える人のことで、当然のごとく「強い人」でなくてはなりません。

私が今放り込まれている「刑務所」は、驚くべき人権無視のところですが、これも、官僚から小役人まで与えられた権力を、彼らが"自分のため"にしか使わないからです。日本が人権大国だなんて、とんでもない。4大権力は人権侵害を平気でし、いけしゃあしゃあとしています。我々は、人権の意味さえもよく分かっていないのです。

「射」はソフトウェアのトレーニング

さて、「六芸(りくげい)」の「射」の話をして。「射」は弓の名人になることです。「御」は、本能としての安、詳を強くすることでした。ハードウェアのトレーニングです。これに対し、「射」は理性レベルの安、詳のトレーニングをします。ソフトウェアです。以前、「安詳恭敬」の「詳」のところで説明した、「一所懸命」になる能力を養成します。

「御」(昔の戦車の操作)や、ウインドサーフィンでは、本能は「命がけ」(の状況)と判断するため、強い感情と意志を発生させざるを得ません。理性が思おうと、思うまいと、本能は「一所懸命になろう」となってしまう。だからこそ、本能のトレーニングができるのです。ところが、そうした特性は、ソフトウェアを創る上では短所となってしまいます。そこで、理性だけをトレーニングするために、「射」が必要になってくるわけです。

「御」で一所懸命になる"能力"(ハード)を養っても、それが"発揮"(ソフト)できなくては意味がありません。この、"発揮"の仕方のトレーニングが、「射」にほかなりません。いついかなる時も、どんな物に対しても、「安詳」になるためのトレーニングです。

『武士の娘』に、当時5歳位の主人公・鉞子(えつこ)が、書道の寒稽古をしている様子が描かれています。

——大寒の朝、障子を開け放ち、暖房も全くない部屋で書を行っていた時、側にいた乳母がすすり泣いていた。ふと気付くと、寒さのために指が紫色になっていた。——

わずか5歳の子が、これほど一所懸命になれるのか、とそらおそろしくなります。人間の意志というものは、すごいものです。

茶道も華道も、「道」のつくものはみな、これを目指しています。天から与えられた能力を、最大限に活かそうとしているのです。

しかし、ルースベネディクトは『菊と刀』の中で、このことを「茶道、華道といった無邪気な遊び」と一蹴しています。しかも彼女は『武士の娘』を読んでいるのですから、その内容を理解する力がなかったのでしょう。合理主義に凝り固まり、「理性を創る」ということに、全く思いが至らないからです。

それにしても、『菊と刀』を激賞する日本の学者とは、いったい何なのか。教育荒廃が起こるのも、仕方がない気がします。

感情の強さは、動物にも当然あります。が、その強さを永く持続することはできません。これは人間だけがなし得る、意志の力によるもので、人間が進歩するのは、意志をいかに強く、永く持続させるかにかかっています。「御」も「射」も、そのためのトレーニングになります。

六芸 <書、数 I>

「書」、「数」の目的は、「理性を創る能力」のトレーニングです。

儒教は、「正しく、強く、安定した理性」を創る方法です。

私は、薪割りのような肉体的技術も理性だと思っていますが、ここでは、いわゆる理性、つまり、精神的技術を考えましょう。

技術を創る方法は、「正しい行動」、これしかありません。仏教では、「業(行動)により報(技術)ができる」としています。「業報(ごうほう)」です。

薪割りは肉体的技術ですから、肉体的行動で創っていきます。いわゆる理性は精神的技術ですから、精神的行動で創ります。仏教では、「業」を「身(しん)・口(く)・意(い)」の3つに分けますが、「身業」で薪割の技術を創り、「意業」で理性を創ります。

精神的行動(意業)とは、「考える」ということです。「安詳恭敬」の「詳」の部分、技術の種類によって違う、と思えばいいんですね。

子供が妙なわがままを言って、ガキ大将にいじめられる。子供は、何が悪かったか必死に考える。これが「詳」。これを繰り返しているうちに、人間関係において、正しい理性ができていくのです。何でもかんでも「イジメ」とひとくりにし、イジメ撲滅を叫びますが、正しい「いじめ」は無くしてはなりません。いじめられる子供の利益にもなるのですから。欧米流の精神論には、「理性を創る」という考えが抜けていることを忘れてはなりません。

この、「考える能力」を養成するのが、「書」、「数」です。「書」は書道のことと解説されていますが、国語のことでしょう。国語を学習する目的は、コミュニケーション能力を高めるためばかりではなく、「抽象的思考能力」を養うことにあります。

"読み書き"の訓練は正しく反省する力をも

養う

我々は夜、今日あったことなどを思い浮かべる時、簡単なことは頭の中で風景にすることも可能ですが、少し複雑になる

と言葉で考えています。言葉がなければ詳しく"考える"ことはできません。

ガキ大将にいじめられた子供は、その状況を言葉でトレース(追跡)し、反省し、少しだけ、人間関係に関する理性を進歩させます。ですから、ガキ大将は正しくいじめなければならず、子供は正しく反省しなければなりません。最近の陰湿な"イジメ"では(いじめ方が)駄目だし、いじめられる方も、いじめっ子のせいにするだけの合理化では、正しい進歩につながりません。

マスコミや日教組が変な知恵をつけるから、いじめは間違った方向に行ってしまいました。が、本来、子供の場合、正しくいじめ、正しくいじめられるのは簡単なのです。"本能のまま"にすればいいのですから。欧米型合理主義では、こういうところが分からなくなってしまいます。

大人も反省によって進歩していきます。そして、反省は言葉で行います。正しく反省する能力を子供のうちに創っておくことは、一生の宝となります。国語は、この能力を創るための重要な要素です。"読み書き"はしっかりとやっておかねばなりません。

仏教では、「正念(しょうねん)」のうちの「心念住(しんねんじゅう)」がこれにあたります。「心念住」は実(まこと)にうまいやり方で、瞑想の中で、自分の理性を本能に照らし合わせて反省し、正しい理性を創り上げていきます。瞑想は自分の本能を見る方法であり、そして、正しい理性を創る素晴らしい方法です。

昔の子供は、知らず知らずのうちにこれをやって成長していました。しかし、今の子供は屁理屈をこね、正しく反省できなくなっています。マスコミや、「誉める教育」のおかげで、合理化が激しくなってしまったのです。

「生まれながらに理性がある」とする、欧米式精神論にかぶれた、アメリカのオウムのような連中の責任ですね。日本式の精神論をちゃんと理解し、ものにしていけば、欧米式の精神論の良さも悪さも分かり、両者のいいところを融合できたでしょう。日本の秀才達は、あまりにも人間性が弱かったため、100%拝米主義となり、教育を崩壊させてしまったわけです。

「反省」については、重要なことなので、また項を改めましょう。

六芸 <書、数 II>

「書」は国語、抽象的思考能力をトレーニングするのが目的ですが、「数」の方は論理的思考能力のトレーニングが目的となります。注目されている"陰山メソッド"は、これに当たるのだと思います。

私は今から50年も前に、北九州の中学校で毎日15分、それをやらされていました。簡単な数学の計算問題が紙いっぱいあり、始めは2割ほどしかできなかった。それが、2ヶ月もすると全部できるようになるんです。

論理的思考能力はまず、抽象的思考能力がなければできません。だから、「書」「数」は一体のものです。寺子屋の"読み書きそろばん"は、まことに的を得た教育と言えるでしょう。

昔、「日常生活の計算は、足し算、引き算、掛け算、割り算で充分だし、電卓もあるからうちの子供には数学はやらせない」と、威張っている親に会ったことがあります。これでは、子供の将来はありません。<正しく考える>という精神的行動が、正しい理性を深めていくのです。思考力のない子供は、行動力のない運動選手や職人と同じで、たいした進歩はしません。

いくつになっても、精神的に子供のままだ人、結構多いですよ。徳育が駄目なためにトレーニング不足になっているか、あるいは、数学を怠ったのでトレーニングの能力がなくなっているか…。理性は技術(ソフトウェア)であることを、肝に命じてお

かねばなりません。自分で創るんです。方法は、正しいトレーニング、つまり正しく考えることです。

仏教・儒教には、この方法が述べられています。逆に、仏教・儒教を読む時には、このことを頭に入れておかねば正しい解釈はできません。般若心経の真髓は、「五蘊(ごうん)皆空(かいくう)」にあります。「照見五蘊皆空」ですが、この「照見」の部分を実語(サンスクリット語)で読むと、2つの部分に分かれます。

「五蘊があると観察し、それぞれが"空(くう)"であると法則化した」

「五蘊」や「空」については、教育上、非常に重要なことなので、項を改めようと思います。

「照見」は、「物の見方、考え方」ということ。通常、我々が「理性」と呼んでいるのは、この2つです。ぱっと判断するのが

「物の見方」、じっくり考えて判断するのが「考え方」。正しくそれができるのが、「正見(しょうけん)」「正思(しょうし)」「(仏教)です。「書」「数」は、その基礎を養うことを目的としています。

「正しさ」について、儒教では「学んで」正しさを身につけるのですが、仏教においては、自然の法則を利用した実にうまい「反省の仕方」を採用しています。

儒教の中に、「自ら(明德を)明らかにするなり」(『大学』)というのがあり、これが仏教の方法に似ているかとも思いますが、詳しいことが書いていないのではっきり分かりません。

「日に三度(みたひ)吾が身を省みる」(『論語』)とありますから、やはり「正しさを学ぶ」のが儒教の方法論だと思います。

「御」「射」は情と意のトレーニング。「書」「数」は知のトレーニングを目的としています。

六芸 <礼、楽 I>

「礼」の目的は2つあります。

(1)自分の進歩、

(2)社会の進歩です。

(2)については、「楽」のところで述べましょう。

「安詳恭敬」は進歩の法則であり、『小学』の一番初めに出てきますが、何も子供だけではなく、当然、大人の進歩にも当てはまります。

「御」「射」「書」「数」は、安詳のためのトレーニングです。「礼」は恭敬のため、「楽」は全てのトレーニングになります。

進歩するためには、「進歩したい」、「進歩しよう」という意志が必要です。この意志が「勇」ですが、恭敬によって創られます。「礼」を嫌がる人は、自分を偉いと思っている人、思いたい人、虚栄心の強い人です。

このタイプはけち臭い小人物なので、礼を尽くすのは、相手にいい思いをさせるためだと思っているんですね。ヨットスクール

にもよくやって来る、自己愛的、妄想的な子供達がこれに当たりますが、今の子供達は全体的にそうなっていますね。

"誉める教育"を推し進め、家庭では母性と父性のアンバランスを創りだし、学校では平等の意味を取り違えて、尊敬されることを否定した、「仰いでも尊くない」先生達によって、こうした子供がつけられました。大人になっても、中身は子供のままという人、結構多いですよ。

「矛盾が変化を起こさせる」——マルクスの弁証法ですが、「礼」という矛盾が、進歩という変化を引き起こすのです。マルクスを信望していたはずの日教組が、教育の場に妙な平等を持ち込むのは、それこそ矛盾でしょう。「礼」は、自分の精神の中にあるものです。「礼儀」のことではありません。

自分の能力を正しく知ること(恭)。偉い人の能力を正しく知ること(敬)。これが「礼」です。「恭」はまた、分際を知ることでもあります。そこで、進歩するためには、分際を尽くさねばな

りません。これが「忠」です。国学の泰斗(たいと)・安岡正篤先生の、「忠」の解釈には、

「矛盾を克服して進歩する」とあります。

まさに、名訳ですね。

この、弁証法そのままのような「忠」を日教組が否定したのは、「忠」を正しく知らなかったからでしょう。間違っただけで使われた「忠」を、正しく使えば良かったのに…。

このように、古きを全否定しなければならぬ革命思想には、「敬」がすっぽりと抜け落ちています。

「礼」なくして"偉く"はなれない

「礼」が嫌われるのは、支配者、権力者、指導者側にも大いに責任があります。マンガ『嗚呼(ああ)、花の応援団』の上級生のように、「礼」を自分の利益のみに使う、「礼」の一方通行が当たり前のように行われているからです。「礼」のもう1つの目的である社会の進歩が、全く頭にはないのです。

「礼」は、上に立つ者にこそ要求されるものです。

「礼讓をもって国を為す能(あた)わざれば礼をいかん」(『論語』) = 「礼で国を治められないなら、何のための礼だ」

これは、次の「楽」のところでも述べることになります。

刑務所は、「礼」の一方通行のいい例で、「矯正」と口だけは立派ですが、全く教育になっていません。儒教、仏教の国なのに、惜しいことです。

「礼」と言うと、下の者が上の者に礼を尽くす、というイメージがあります。が、「これ(人民)を動かすに礼をもってせざれば未だ善ならざるなり」、「君、臣を使うに礼をもってし」、「これ(人民)を斉(ととの)うるに礼をもってす」、「国を為(おさ)むるに礼をもってす」、「上礼を好めば」(いずれも『論語』)など、「礼」は権力者、支配者、指導者にこそ求められるものですから、我々も「礼」に対するイメージを変えねばなりません。

「恭敬」は、自分を進歩させるのみならず、人をも従わせ、進歩させるものです。となると、大学を目指す人、偉くなろうとする人なら、「恭敬」、「礼」は身につけるべき必須事項になりますね。

それにしても、今は上も下も無礼者が多くなりました。「礼」がなければ「忠」はない。「忠」がなければ「楽」は起こりません。これが、「教育」や「経済」が崩壊した理由でしょう。

「礼」といい礼というも玉帛(ぎよくはく)をいわんや(『論語』) = 「礼、礼と言っても、型のことではない」

こう、孔子を嘆かせたほど、「礼」は外見だけに堕ちやすいものです。しかし、「己(おのれ)に克(か)ちて礼に復(かえ)るを仁と為す」(『論語』)とあるように、「礼」と「仁」とは一体のものであり、全く内面的なものです。「礼」を身につけなければ本当の偉い人にはなれないと知れば、我々も「礼」を大事にできるというものです。

六芸 <礼、楽 II>

「礼」は、進歩を目的とした精神であることは、『安詳恭敬』を考えれば明らかです。

ヨットスクールにやって来る生徒達は人間性が進歩していないため、多くが子供っぽい、と言うより幼児っぽい。彼らは「褒めて伸ばせ」の犠牲者です。褒められ続けると、当然、「己」が

分からなくなってしまいます。「礼」とは、己と名人の差を知ることによって生じるのですから、褒められると「礼」はできません。"無礼者"になってしまいます。

世を騒がす問題児をよく見ると、「決して人を認めない」というところが共通しています。日教組の訳の分からない平等

思想が、子供から「礼」の能力を奪ってしまい、問題児をつくつたのです。

「礼」は"差"から生じるもの

「礼」はまず自分のためにあるもので、「礼」を尽くさないと自分が損をするのです。そして、その「礼」は、「差」から生じるものであることをよく理解しなければなりません。

「等殺(とうさい)は礼の生ずる所なり」(『中庸』)

「礼」は他の能力を認めることです。今流行りの「個性を尊重する」も、「誰にでも何か優れたところがある」も、「礼」です。権力者が「礼」をもって支配すれば、「適材適所」となり、社会は発展します。

「上、礼を好めば、則(すなわ)ち民、使い易し」

「君、臣を使うに礼をもってし、臣、君に事(つか)うるに忠をもってす」(以上『論語』)

適材適所で使えば、持てる能力を全力で発揮します。

「これを齊(ととの)うるに礼をもってすれば、恥ありて且(か)つ格(いた)る」(『論語』)

(= 礼で統制していけば、道徳的な羞恥心を持つようになり、正しくなる)

「恥を知るは勇(進歩しようとする意志)に近し」(『中庸』)

権力者が、「礼」でもって人民にうまく恥じをかかせてやれば、人民は進歩し、社会も進歩します。だから、「良く礼讓をもって国を爲(おさ)めずんば、礼をいかん」(『論語』)、何の為の礼か、ということになります。

日教組の「道徳教育反対」で育った秀才達が権力者となり、国を動かしているのですから、国がおかしくなるのも仕方ありません。

男は会社に入り、係長になれば数人の長となり、課長となれば数十人の長となります。何よりもまず、一家の長とならねばなりません。だから、家族や部下の幸福のために、「礼」を身につけないといけなのです。これが男の責任です。

「礼といい礼というも玉帛(はく)を言わんや」(『論語』)

「礼」は、礼儀や外見のことではなく、己を知り、人を知る能力のことです。「恭敬」のことです。男として「礼」を身につけなかったら、自分も人も不幸にしてしまうのです。

進歩は行動抜きにはありえない

ここで「楽」の説明に移る前に、進歩について述べておきます。

いい車を手に入れたり、結婚したり、課長になったり、株で儲けたりした時、我々は幸福を感じます。人間は「価値」を獲得した時に喜びを感じ、幸福になります。進歩というのは、自分の価値が上がること、新しい価値を獲得することですから、当然、進歩した時には幸福になります。

しかし、「物」という価値は、獲得する度に喜びがどんどん小さくなり、次はもっと大きな価値を獲得しなければ同じ満足を得られなくなります。「物」で幸福になろうとすると、きりがありません。その点、「技術」の方は、進歩し続ければいよいよ、その進歩した技術を使って行動する度に幸福を味わえます。

仏教、儒教のキーワードは「進歩」です。進歩で幸福になろう、ということだと思います。教育の目的も全く同じですから、仏教、儒教は、教育にそのまま使えるのです。「礼」も、その面から考えないといけません。

進歩は行動抜きには起こりません。今の教育のように、知育中心になってしまうと、益々行動しなくなってしまいます。体育でさえ、筆記試験を優先するという異様さです。知識そのものは、いくらあっても進歩には寄与しません。それを行動に移して、初めて進歩が期待できるのだということを、肝に銘じておきましょう。

六芸 <礼、楽 Ⅲ>

「礼といい、礼というも玉帛(ぎよくはく)を言わんや。楽とい
い、楽というも鐘鼓(しょうこ)を言わんや」

(礼は礼儀のことではない。楽は音楽のことではない)(『論
語』)

儒教の日本語訳を読んでいて、「まさか」と思ったり、「物足
りない」と思うことがよくあります。きっと、訳者がよく分かってい
ないからでしょう。「礼」、「楽」についても、日本語はまったくも
って意味不明ですね。

「詩に興(おこり)、礼に立ち、楽に成る」(『論語』)

「"楽"に成就する」のですから、「楽」が目的。修己治人の
目的、つまり、人を治めて社会を「楽」にするのが目的です。

その目的を達成するために「礼」を使うので、君子は「礼」
の能力を身につけねばなりません。「礼」を身につけるには、ま
ず、人間性を完成させねばならないので、そのために詩(詩
経)を習得しなければなりません。詩の意味については、ここで
は述べないことにします。

「国家人民のために立てる君にて、君のために立てる国家人
民にはこれ無く候」(上杉鷹山)

治人は人民のために行うもの。では、人民をどうすれば人
民のためになるのでしょうか。それが「楽」です。

「楽」を分かりやすくするために、「創発」の説明から始めま
しょう。

「創発」とは

「創発」=「Emergent Property」…先行予件から予測
することが不可能な発展。

「全体は部分の単なる寄せ集めではなく、それ以上のもので
ある」(アリストテレス)

単に寄せ集めただけなら「和」です。ところが、その「和」の中
にとんでもない素晴らしいものが混じっています。それが「楽」。

「Emergent」は、「新たに出現した」の意。昨年の
「SARS」騒ぎの時に、「Emerging ウィールス」という言葉が
使われました。

「Property」は「特性」。「創発」は、「新しく出現した特
性」という意味です。

私達は、棒 1 本あれば、石ころを押ししたり、引き寄せたりで
きます。さらにもう 1 本使うと、今度は"つまむ"という能力を獲
得し、今まで平面しか移動できなかった石ころを、空間まで移
動させることができます。棒が 1 本から 2 本になったら、その能
力の次元が変わってしまったのです。

棒の数が増えただけで、これほど劇的な機能の進歩をもた
らす。これが人間ならどうでしょう。人数が増えると、とんでもな
い社会の進歩が期待できるのです。

「楽」は、「鈴をふって神を楽しませる」という意味です。楽し
むこと、快感が発生すること。

先回述べたとおり、我々は価値を獲得した時に快感が発
生します。その中でも、「進歩」が最高です。自分が進歩する
ことも創発ですし、社会が進歩することも創発です。

「新しい能力を獲得すること」、これが「楽」です。

「大学の道は明德(めいとく)を明らかにするにあり、民を新
たにするにあり…」(『大学』)

治人の目的は、個人も社会も進歩させることです。

福沢諭吉、杉本鉞子の行動に「楽」を見る

「諭吉が、わが国を封建国家から近代国家へと転換させる
ことなしには、国家の独立を維持するのは困難であるという使
命感から、3 度にわたる欧米視察中、知力の限りを傾けつく
して、西洋近代文化の構造と機能解明のために精力的に見
聞きしてまわった。……それまでのわが国の蘭学洋学研究
は、医術、兵術、航海術など、技術が中心であった。けれども

その技術を生み出し、組織化する主体そのものにまでさかのぼって西洋文化を把握しなければ、単なる物まねに終わってしまい、新たな文化の創造などできようはずもない。他の者が汽車の速度やレールの寸法を面白がっている間に、諭吉は鉄道会社の経営について質問していた。他の者が外科手術や病理見本に讃嘆しているかたわらで、諭吉は病院の経営法や社会保証制度に注目していた。他の者がベルサイユ宮殿の音楽隊に聴きほれ、ナポレオン3世に敬意を捧げている一方で、諭吉はアメリカ大統領選挙や南北戦争の動向、それらの欧州外交への影響などを、事細かに『西航手帳』にメモしていた」

諭吉は、文化も文明も「楽」であることを、よく理解していたわけです。

「要するに、目の付け所の的確さもさることながら、他の者が目の前の細部事項にかかずらわっている間に福沢はそれら細部を関係づけ、作動させる全体のオーガニゼーションに着目していた」(芳賀徹『大君の使節』…多田建次『海を渡ったサムライの娘 杉本鉞子(えつこ)』より孫引)

諭吉の行動から「楽」の意味が非常によく分かります。

技術の進歩も、芸術も、交通手段も、社会の繁栄も、「楽」として発生したものであり、その母体は社会であり、国である。自分の国も同じような発展をさせようとするなら、その社会の中にあるメカニズムを取り入れねばならない…。<この考え方が、明治以降の日本を、目覚しく発展させることになったのでしよう。

では、戦後の教育はどうでしょう。初めは押し付けられたものであったとはいえ、後でいくらでも修正できたはずで。諭吉のような考え方で接していれば、欧米流精神論を日本の教育に採用してもうまくいかないことくらい、すぐに分かったでしょう。彼らの方法では、日本の教育は「楽」にはならないのです。

『武士の娘』・杉本鉞子も諭吉も、外国の文化文明に対する態度が非常によく似ています。2人とも、外国と自国の2つの文化文明から、「楽」を創り出そうとしています。これができるのは、

「自分自身のアイデンティティを自国の文化伝統に置きながら、異文化をも寛容に受け入れる。そして、自国の文化に対する深い認識と矜時を抱きつつも、異文化への正確な理解と親しみを持っている」

「それは、東西両洋文化に対する、幅広い教養ばかりか、強靱な精神力、公正な視野、柔軟な思考力があって初めて可能なことである」。

秀才は、とかく外国かぶれになりやすいですね。会社でも、アイデンティティを自分の会社に置いていない人の判断や行動が困りもののように、外国かぶれの秀才の判断は、国にとって災いのもととなります。アイデンティティを自国の文化に置くのは、自国に対する「礼」です。

「礼に立ち、楽になる」

「礼」無き者は、「楽」を成すことはできません。

六芸 <楽 II>

「システム工学」

「システム工学」(中森義輝 コロナ社)を読むと、楽のことが非常によく分かります。

「システムとは、構成要素の相互的存在または相互的働きによって、集団全体が特定の性質を持つものである。工学分野では、たくさんの要素がつながりあった人工物をシステムといい、政治・経済・社会学の分野では、法律や制度の

体系をシステムという。経営学の分野では組織の形態をシステムという」

「集団全体が特定の性質を持つもの、というよりも、集団全体が特定の目的を持つものというように範囲を制限したい」

「システム思考とは集団が何の集まりか、という実体的認識ではなく、いかに集まっているかという関係的認識である。システム思考法に基づいた体系的、組織的な問題への接近法をシステムズアプローチという」

1.

ここまではNHK TVの「プロジェクトX」にてくる、プロジェクトリーダーの苦労を思い浮かべてもらえば良く理解出来る事でしょう。

「近代科学は客観性を重んじ、主として分析的なアプローチにより、物事の本質を明らかにしようとしてきた。近年、人間が扱う対象が複雑大規模になってきたことから、総合性を基本的思想とする科学であるシステム科学が登場した。しかしながらシステム科学は他の科学的技術と同様、西洋の近代合理主義の路線を歩んできた。したがって、人間の意志や行動に左右されるシステムに適用しようとするとき困難に直面することになった」

教育（学校）はまさに「人間の意志や行動に左右されるシステム」ですから、システム思考がある、なし関係なく、合理主義ではうまくいかない、楽は望めないのでしょうか。進歩も楽です。巷にあふれるまことに幼稚な人間性しか持ち合わせない若者達、中年達は戦後合理主義教育により、人間性、社会性を進歩させ損なった犠牲者達です。

2.

「システム工学においては、対象を一度分解し、システム構造を介して組み立てるシステムティック（Systematic）な方式を採用している。要素還元主義と非難され、加算的組み立てに終わってしまう危険性を指摘されるゆえである」

加算的組み立てだけなら単なる「和」であり「楽」にはなりません。

「一方、西洋近代科学のあり方に疑問を持つシステム科学者達によって、対象自体の形成過程を配慮し、創発的全体性に注目するシステムック（Systemic）な方式が提唱されている」

これが「最近20年間のシステム学会の傾向」だそうですが、孔子は2500年前にこれを提唱していたわけです。

「中国哲学は古代から調和と全体主義に対する信念によって特徴づけられる」

「人間の考え、意図、行動という生活世界はその環境と切り離しては理解出来ない」

「人間の道と知と行はたがいを系統的に制約すると同時にたがいを支えている」

3.

わかりにくい言いまわしですが言わんとする事は分かりますね。中国のシステムアプローチに「物理」「事理」「人理」があります。薪割りというシステムを考えるなら、「物理」は丸太、その大きさ、ふしや枝の具合、年輪の様子、腐りやすいか、適当な大きさか、形は。丸太を置く土台は平らでしっかりして固いか。場所は広くてじゃまな物はないか。斧はバランス良く、適当な重さで、適当な鋭利さ、柄は握りやすいか。「事理」は割る人の技術は高いか、その人の技術を発揮させるコンディションは整っているか。

「人理」は、薪を使って火をおこす人は満足するか、です。人理の所で楽が起こります。又薪を割る人にも楽が起こっています。

経営でも教育でも同じメカニズムで楽が生ずるので、指導者は「物理、事理、人理」を常に頭に置きながら、システムの目的に合わせて行かねばならぬ、という事です。なお礼は「事理」に対して取ります。

指導者に礼がなければ楽を生じさせる事は出来ません。又進歩も楽である事を忘れてはなりません。

4.

手をつないで皆一等賞でゴール、先生とお友達、体罰反対、叱るより誉める、通知表反対・・・では先生にも生徒にも

礼は生じませんから進歩はありません。 共産主義国家が全部駄目になってしまったのは、事理・人理を十分に考えない、礼無き社会だったからではないでしょうか。

六芸 <楽 III>

音楽との関係

六芸で言われている楽は音楽の事です、音楽は「音」の「楽」ですから、楽にする基本的な能力を養成するにはもってこいなのでしょう。

音楽は、楽になったかどうかは耳で聞けばすぐにわかります。楽にする為にはそれぞれの楽器の能力をうまく、適切に発揮させねばなりません。演奏者は、忠であらねばならないのです。

そこで指揮者は、どのようにあらねばならぬか、が問われることとなります。これを社会に応用すればいいですね。「対位法は二つの次元で展開する。水平方向と垂直方向、つまりメロディーと和声だね。対位法では二つかそれ以上のメロディーが同時にひびく。メロディーがたがいにどんなふうひびくかということは、無関係に組み立てられていながら和声をつくらなければならない。それが対位法だ。音対音というのが本来の意味」。(「ソフィーの世界」対位法)。「ソフィーの世界」に「対位法」という項がなぜあるのか、完全には理解できませんが、「理性(哲学)」の世界と「現実」の世界の融合(楽)のように思えます。ここでも音楽を例に使っています。リズム・メロディー・ハーモニーからなる音楽は、その一つ一つが、それ自身楽ですが、集めると、もっと素晴らしい楽に

則ち勤む」。社会を楽にするには、民が敬、忠でなくてはならない。その為には、支配者が壮(大物)でなくてはならない。

又、孝、慈(仁)でなければならない。「善を挙げて不能を教うる」は、礼ですから、楽にする為には、リーダーが、礼

なります。単なる音だけなら、それ程心をとらえるわけではないのに、太鼓のようにリズムだけで心を揺さぶられます。

メロディーとして高低をつけると、我々は感情を操られてしまうし、さらにハーモニーにするとそれが強調されます。単なる音をうまく組み合わせることにより我々の心を楽しませる楽の状態をつくり出す事が出来ます、この為には、作曲者、編曲者、演奏者を養成し、その能力を発揮させねばなりません。これを社会に当てはめると、孔子が言う「楽に成る」事が出来ます。

「安上治民は礼より善きはなく、移風易俗は楽より善きはなし」(考経)。「礼に立ち楽に成る」(論語)。同じ事ですね、「礼の用、和を貴しとなす～和を知りて和すれども、礼をもってこれを節せざれば、又行わるべからず」。楽は、ただの和ではなく、特別の和であり、それには、礼が重要な役を果たします。礼なくして楽はあり得ません、更に「君臣を使うに礼をもってし、臣君に事うるに忠をもってす」皆が忠(己をつくす、実力を発揮する)にならなければ楽は起こりません。その為には、君に礼の能力が無ければなりません、忠には敬が含まれています、「上礼を好めば、則ち民は敢えて敬せざる事なし」。更に「民をして敬忠にして以て勤ましむるには、これをいかん。子の曰く、これに臨むに壮を以てすれば則ち敬す。孝慈なれば則ち忠あり。善を挙げて不能を教うればを身につけた大人物でなくてはならないのです。「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」。詩に興る、の説明はまだしてませんが、この言葉は社会のあり方、リーダーに対する重要な意味を含んでいます。ある論語の解説書を読むと、「(人間の教養は)詩によってふるいたち、礼によって安定し、音楽によ

って完成する」とありますが、そんないいかげんな意味ではありません。二千五百年の歴史に耐えて生き残っている儒教なのですから、内容は真実であり科学なのです。「安詳恭敬」と「六芸」の説明を試みましたが、儒教を勉強しておられる方には、今までとは違う手応えを感じていただけたら幸いです

す。「知・仁・勇」「仁・義・礼・智・信」「詩・礼・楽」「忠・恕」「命・性・誠」等をまず、現実に則して、定義して、もう一度儒教を読み直してみると、全く新しい世界が開けて来ます。仏教も同じ事ですね。